



博覽會見聞錄

九

石細工  
陶器硝  
子等之區

洋学文庫  
文庫 8  
C 381







博覽會見聞錄卷之九

第九区

石瓦焼物硝子鉄の区あり

此区の第一鉄を自然成の石人工おしく作られたる石

大理石煉化石炭石を瓦家のかざり探窟のかざ

る等の石細工又ハ石白磁石等あり

そ亦二鉄を焼物鉄ありひた室内を煖むる小用

うる火焚所 英語ストーブ兼 液カッヘルといふものあり

陸奥民回遊書





才三族を硝子細工日用ふかく磨くのまざるもの  
 八さらあまを吐きの飾りとあまをべきもの又ハ擬真  
 珠擬珊瑚其外硝子よて種々の名玉を擬造した  
 るものあり

石を礦山物の類として多くハ才一匹見聞録一

載せたり然るハ大理石を家の飾り不用らるもの

のみく極免く免くく磨き鏡の如く艶やのみ

して出せし其色種々出して瑪瑙の如くあるも

あま地を白くして黒き星あるもの茶色ある者

松色あるもの黒きもの白きもの等石のまらふ

ていまぶ物もはくらざるを出一又うれみく他

了たる家財の類をも黝く出してたり

佛系西人とかかふる石みく火焚所カストーブ又を

作りたるをあまに出せしられハ寒室のら

室内を暖むる不用らるものみく王侯貴人富貴

の人の家も備ふるものあまハ美潔をもちると

して作りたるもの作り作りいふく其色さ

まくある石をよく磨き鏡の如く平らふ上

の方と横の方とあら人物鳥獸かくらさあどの

彫の甚く巧みあるあまハ兼く吐きの飾りと



多形やうふせを佛人のかゝる事ある器用あり  
 て姿小風韻あるやうんを用うる性質なるを  
 最とも人の目をとゞむる出品ありそ外火焚所  
 の各國とも出品あり但一鉄ありて製したるも  
 のを才七区のものにして陶器みく作まるのた  
 埃区の才二類小属を大理石みく作したるもの  
 英人の出品せしも甚く其ぶ  
 魯西亞を名石を多く産する國なりとくに孔雀  
 石の出品もつと多し堀出たるやあるも  
 板の如くみ切たるも紙の如く薄くしたるも

あま又其細工物あまそあま鈕襟留め袖飾り耳  
 飾り等らさらあまあらひ紙の如く施したる  
 ものめく板の四方を包み札を巻く草笥の前  
 を覆ひ箱笥の上面とありあらひ紙小張り  
 て書籍の表紙とありあらひ掛笥を外交房具を  
 作りあどせしを緑の色鮮みして甚く美しきも  
 のあり  
 又同國の出品大理石孔雀石ありて作した  
 る掛笥あり其上石あり葡萄覆盆子そ外種々  
 の木の實を彫りたるを載せたり白葡萄ハ白石



を彫りて常の葡萄を紫色ある石を彫りて作る石  
 の質透明あるものありて恰好よりしき故に真の  
 葡萄の水をふくむたが如くふんゆ葉の彫り  
 もその他の木の葉もこれありて推し知るべし  
 英國印度領の出入の内は白き大理石の厚さ一  
 寸ものありてあらず葉つなぎの模様を彫りてぬきに  
 るありて標屑飾りの状する石のところを幅一分  
 寸のありて透しゆるるぬき空りあるところ  
 所は五六分をくりつたのうららもあらずされども缺  
 け損じたる跡あり細工のうららを知るべし

白石ありて人の像又は獣状ありて鳥或は神  
 の像ありて彫りて家の飾りとなす事、西羅巴の風俗  
 ありてその形たる皆古代のものをもよおし彫り  
 たりて其由其大なるべきことの人など其像にた  
 るもあらず希羅巴の政羅巴の中ありてもつとも古き  
 國ありて古代の彫り物多く其國ののらるるを  
 るつとてうらら物細工人を多く希羅巴をよおし  
 とすといふうららばらのたぐいの博覧會ありて希羅  
 ばの多く古代の彫り物煉り物等を出せり像  
 の才缺けたるありて見ざるべきやうなるも工人



のちおん<sup>て</sup>あるをもつて<sup>こ</sup>くありく<sup>り</sup>あざむ<sup>り</sup>列<sup>ら</sup>れ  
た<sup>る</sup>古<sup>代</sup>の白石の雕像<sup>を</sup>亞非利加<sup>の</sup>トニス<sup>よ</sup>  
アモ<sup>も</sup>出<sup>る</sup>一<sup>つ</sup>たり

白石の雕像<sup>は</sup>各國名工<sup>多く</sup>希獵<sup>以</sup>右利<sup>を</sup>初<sup>め</sup>  
として<sup>今</sup>代の名工<sup>おの</sup>く其<sup>技</sup>倆<sup>の</sup>妙<sup>を</sup>競<sup>へ</sup>  
て其<sup>細</sup>工<sup>を</sup>今<sup>を</sup>以<sup>右</sup>利<sup>も</sup>つ<sup>とも</sup>も<sup>を</sup>妙<sup>を</sup>極<sup>む</sup>  
す一<sup>其</sup>出<sup>る</sup>も<sup>う</sup>く<sup>小</sup>夥<sup>一</sup>放<sup>ふ</sup>以<sup>右</sup>利<sup>の</sup>出<sup>る</sup>の  
一二<sup>を</sup>左<sup>ふ</sup>奉<sup>げ</sup>く<sup>其</sup>余<sup>を</sup>略<sup>す</sup>

小児<sup>の</sup>魚<sup>を</sup>も<sup>み</sup>提<sup>げ</sup>く<sup>いと</sup>た<sup>の</sup>け<sup>み</sup>詠<sup>め</sup>く  
居<sup>る</sup>さ<sup>ぬ</sup>を彫<sup>る</sup>ある<sup>ひ</sup>る<sup>婦</sup>人<sup>の</sup>莫<sup>大</sup>小<sup>あり</sup>あ<sup>ら</sup>ふ

づ<sup>書</sup>を讀<sup>み</sup>て居<sup>る</sup>さ<sup>ぬ</sup>を彫<sup>る</sup>ま<sup>を</sup>の<sup>莫</sup>大<sup>小</sup>  
小<sup>あり</sup>あ<sup>ら</sup>ふ<sup>づ</sup>眼<sup>の</sup>書<sup>み</sup>と<sup>ま</sup>ま<sup>を</sup>や<sup>が</sup>お<sup>の</sup>づ  
あ<sup>ら</sup>か<sup>つ</sup>そ<sup>め</sup>ふ<sup>あり</sup>ゆ<sup>く</sup>あ<sup>ら</sup>さ<sup>ぬ</sup>も<sup>え</sup>ら<sup>る</sup>又  
工人<sup>眼鏡</sup>を<sup>か</sup>け<sup>く</sup>蒸<sup>氣</sup>車<sup>の</sup>雛<sup>形</sup>を<sup>作</sup>りて居<sup>る</sup>  
あ<sup>ら</sup>精<sup>神</sup>全<sup>く</sup>この<sup>雛</sup>形<sup>小</sup>止<sup>り</sup>て外<sup>ふ</sup>りつ<sup>ぶ</sup>  
ん<sup>を</sup>考<sup>へ</sup>て<sup>細</sup>工<sup>を</sup>考<sup>へ</sup>る<sup>情</sup>顔<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>れ</sup>あ  
る<sup>い</sup>わ<sup>石</sup>像<sup>の</sup>彫<sup>刻</sup>を<sup>学</sup>ぶ<sup>童</sup>子<sup>右</sup>の<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>提<sup>を</sup>  
取<sup>り</sup>左<sup>り</sup>の<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>鑿<sup>を</sup>持<sup>ち</sup>下<sup>め</sup>石<sup>像</sup>の<sup>顔</sup>を  
彫<sup>り</sup>た<sup>ら</sup>あ<sup>ら</sup>す<sup>ら</sup>れ<sup>ま</sup>す<sup>童</sup>子<sup>の</sup>眼<sup>精</sup>の<sup>彫</sup>り<sup>か</sup>  
ま<sup>た</sup>ら<sup>像</sup>の<sup>顔</sup>止<sup>り</sup>て<sup>顔</sup>八<sup>文</sup>字<sup>の</sup>紋<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>か



といふ小何あまも見向もせぬ風情ありあら  
 いを三歳をのりの幼児小麦の粉の入りたる袋  
 を踏み微笑して居るに後人の叱るものあらん  
 と思ひわざと力をりねく踏み居るよといふさ  
 ま小見くふあらひに童子湯をて茶碗を取落  
 し泣くをそのあまもさうぬあるあまも又中年の女子  
 の幼き児を遊ばせて居たるが何事をやあしけ  
 ん女子を顔ふをあて泣くさぬをあまを幼  
 き児をまも泣くと思ひ慰めかひくおのまも  
 泣らんといふる風情女子を傷りて泣くさぬをさ

るあまも女の下に共い船のあらりあまも  
 共の如きもの石像あまも其情おのく眼鏡  
 ふあらりれは足ふ倣り神のさぬふも倣まれ  
 たる実ふ妙技のあらり妙あらりのといふべ  
 又白土を練りてけのおきものを模造するあり  
 巧みあらりのおまもこの石彫りふ似たりといふ  
 油繪を裏にせしる最上の石版画と其趣向相同  
 づれを修る法を名工の彫りたる像を練りた  
 る去みく覆い乾りて型とあしられ白土を



充てゝ作る事陶器を製するが如く鑄物を作  
るの如くするあり

色の石の美しきを細うめきりてを合せ寄  
木細工の如くみし草花木の實山水のけしき

等さむくの繪を作し其小なるを釘小作  
りあらひハ襟留めあらふ作し其大なるを机の

上画草笥の前面あらを飾りあらひハ卦算文鎮  
とし箱の上を装ふ者甚く精好みしてよく

きりのあまをれをモカイクといふられまゝ以  
左利の名産ふして其妙を極免たる名工多く其

出ふも又夥しくあり其精良なるを袖釘両箇小  
ても其價數十フロリシ小至る徑式尺をどのもの

圓札あらと全身黒石の光澤あるものあり作る  
黒石の艶を最上の漆塗の如し其中小ぬ色の石

あり貝を一の形を化して箱めらる繪の如く小  
を隈とらるやむは作りたる人ハ螺の如き貝

の内の方あらどの如きしらら内ふりたる方  
を赤く外の方次第小落くあるものあきおかく

ふらららあを一方赤く次第小落色ふあをたる  
石を用ひ画きたる如くみせまらるの貝の間

大正  
巻之九



小枝珊瑚樹もあるれはまことの珊瑚樹を落  
くともぎく箱たるりのある周圍を花つあきめく  
縁りを取るまゝ盡く石をもつて石小を自然  
小粉色をあせらるる石を赤白紫茶色紺淺黄  
落紅黄色等をほくの黄くきりのを用うられ  
以右利めも産されどもまゝ他國より輸入を  
といふ碧色小して都吉の如く間小金砂子交り  
たる石を亞米利加産のものを輸入して用うら  
由共机一箇の價三千五百フロリン  
ありかゝる精妙のものを出るの翌日にもや

買人定て某氏買いたる珊瑚を附けたる  
同一小机も花寄せの如くを伴うたるあるこ  
まきと其形ち彩り美くくして風致ある其價  
を八千フロリン 九千五百 百八十兩程 ありられも同旅  
たちまち買はせたる  
モサイクは古代より以右利の名産にしてモサ  
イクの額面一枚いづれも數百年前のものゆ  
て古代の妙技の跡不出せり古代のりのを石を  
小さき四角形小切りたるをあらはせし  
をあらりのあるをれより次牙小巧なる地



を一枚石いちまいいしあつて他ほかをうねり細こく切きりたるは色の  
 石いしを箱はこめ種しゆ々のもやう隈くまどくもいでらるやう  
 ありたり以い右利うりやの内羅馬うちろうまの産物さんぶつを其風そのふうなり又  
 同國どうこくフロレンスといふ所ところにて他ほかる物ものをある  
 産うきたり多おほくある石いしの隈くまどくもやう隈くまどくりのを  
 撰せんと細こく切きらむ切きりぬきて箱はこめらむやうみさそ  
 いふ亞非利加あふりかのトニスの出いずみも古代こたみのモザ  
 イクの大おほくあるものあり昔むかしは其國このくにふてもかゝる  
 細工さいくをせしむるべし  
 欧羅巴えうらわの人家おんやの石室いしむつありいへ煉せん化石いしもして煉せん

化石いしも其外ほかさぬくの建築けんちくも用もちわ其用もちことみ  
 廣ひろくされば法國えいこく其精せいを競きんひ堅かきを争あふ其形かたちち  
 又種またくあると尋常よめつひのちやうじやう長方形ちやうけいのものをもどめ石いしたゞ  
 みも用もちらるものありいへ正せい方形けいもありあり  
 菱ひし形けいも出入でいり口くち等らうの上うへも用もちらるもの橋はし杭かの留とど  
 用もちらるものを孤こるも用もちらる煙突けむりだ又または樋ひ等らうも  
 用もちらるもの竹たけも用もちらる飾かざりを要えらる所ところも用もちら  
 るもの草花くさむぎかゝるさ獸けものの顔らを彫くりたるも  
 ありありいへこれも彩色さいしきたりたるもあり  
 圓堂えんどうの周圍まわり縦横たてよこの廊らうの間あいだ庭にわ甲がの八九はちやう乙おつの八九はちやう  
 ありあり博覽會はくわんかい筆記ふし



の附圖を見 丹を細のある芝を植ゑ其間小いら  
 合ハきべー 丹を細のある芝を植ゑ其間小いら  
 いぬの草花を植ゑあらばきこく小き  
 家を立つらもあは其乙の丸あたるくくら丹  
 獨乙の煉化石の出ふあは徑に留木どの半圓の  
 形ち丹煉化石を敷き石だくみとあは其煉化石  
 七七八分などの菱形丹化すたるものめく移く  
 の色丹塗すこれに組合せく籠目六出の  
 花のちやうをあせす半圓の一文字丹あはたる  
 方丹を三段の上り段あはこれ丹煉化石あは弧  
 あり丹丸くあはたる方丹を茶色の煉化石丹て

丹化たる探干あはこれ丹移くの様模を彫成  
 一其上丹まき紫線あは彩りたる丹まきを附く  
 葛加づ朝顔やうのもの纏ひたるまで一ツ  
 として煉化石丹あはらざあは高さ三間を  
 丹化す其前丹まき煉化石製の飾り物を懸け  
 りられ普魯社國の都ベルリンの製造所の出  
 ふあは其製造所を十二馬力の蒸氣あはるく  
 家探る等の飾りもの敷瓦壁瓦等の物下丹化  
 学小用うる竈丹至るまで製造をといふ  
 粉挽白大抵風車水車蒸氣等めく動のあはる



ハ甚おほぶ大おほあるものも用もちうべし。こころ小西洋人の常じょう  
 食たむパンあまは温飽うんぱうの粉こなを要えする事甚おほぶ多おほ  
 く粉挽こなひきの業わざもすこ多おほう。ざる事を得えむ。さき  
 ハ諸國あまこくともふ石白いしろうの出でふあま獨ど乙いつを圓堂えんだうの後うしろ  
 ろの方あた小あま雨あまざら。み列つら総そう多おほく其石白いしろう大小おほいら  
 り後うしろある肉にくみ径ぢやうり六尺ろくせきむつりゆるあま御蔭おかげの  
 如ごとき石いしゆりて中ちゆう紅色こうしきを帯おび其質まきめめく堅か  
 くして汚蔭みかげの比たがひふあらま。燠地あつち利りのものへ庭にわ甲かの十二  
 の前まへふおけり。これま。其後そのち秋あきいら。あま砥石としい  
 もやが國くにのもの。こゝ大おほいみ違ちがひ皆みな丸まるき板いたのや  
 うみ。て軸ちゆうを通とおし。あまひの踏ふみ。あまひの器き械がい  
 小こ廻ましてま。やら所ところふ又またをあて。研とぐものあ  
 ま。其形かたちま。石白いしろうの如ごとく唯ただ石いしの質しつ異なる  
 のを機き関かんを倭わかゆる細さい工場くわうみ設まぐるもの。機関きかん  
 の運轉うんてん小こ砥石としいを自然しぜんふま。や其そのよ小細せき。炭すす  
 を仕掛しかけ。壺かきらね。や水みづ一滴いつてき。漉そぎ。下くだを中ちゆうう。小  
 せり。

其その國くにもくも日用にちよう小こ欵かんくべ。あま。さき。あま。西せいサキ。ソニヤ。普ふ  
 見み録ろく 卷ま之の九く 十一



魯社の都ベルリンあどのもの皆高名あるベル  
 リンの製造所は百十年をのり前ふ取設けたる  
 もの、他英吉利、地利のボエ、エ、ヤあど又  
 陶器、小名あど、珠、夜、の博覧會、小三級事務官納富  
 分次郎ハ本区陶器、査の検査官、小撰、其見とる  
 所を報知せし、一、のば、英、の、中、一、く、  
 る事を得たり、猶、同、人の、調、ら、べ、た、か、書、物、多  
 く、あ、る、後、小、刊、行、を、一、  
 允、を、陶、器、を、日、常、食、用、小、供、ある、肉、皿、菓子、皿、水、次、  
 大、瓶、コ、ッ、ス、一、つ、ぎ、嗽、盤、小、用、うる、水、次、水、鉢、花、瓶、

香爐、燭、臺、其、外、種、々、の、皿、鉢、類、を、初、め、と、し、て  
 壁、を、装、小、焼、物、板、石、だ、く、み、小、さ、る、四、角、の、焼、物、ある  
 ひ、わ、人、物、ある、ひ、を、花、鳥、或、ひ、を、獸、ある、ひ、ハ、魚、を  
 と、陶、器、あ、く、作、り、飾、り、と、し、焼、き、物、の、額、焼、物、の  
 札、腰、掛、等、も、あ、る、あ、る、ひ、を、化、学、小、用、うる、器、械、又  
 如、時、斗、の、時、の、板、色、も、さ、う、く、形、ち、も、種、々、櫻、の、如  
 き、薄、紅、あ、る、若、葉、み、似、たる、緑、も、あ、る、潔、白、ある、ひ  
 白、玉、を、敷、き、碧、色、ある、を、紺、珠、み、似、た、る、と、あ、る、ひ、  
 銅、の、色、小、擬、し、あ、る、ひ、ハ、金、の、模、様、あり、古、代、模、様  
 の、凡、雅、ある、彩、寄、の、繪、中、う、の、花、く、し、き、あ、る、ひ、を、写



真まことの如ごとき画ゑあり又油繪あぶらゑの如ごときもあり又日本  
の模ましを倣なまりあるひに支那しなの風致ふうちを模まる諸國しよこく  
の出石いし奇きを競きひ巧たくまをあるそひ工く夫そ小こ誇たかり長廊ちやうらう  
せましと陳列ちんれいせり

普魯ぷろ社の政府せいふの陶器製造とうきせうぞう所ところを其都みやこベルリンべるに  
あり寶曆たから十三年じゅうさんねん千七百六せんしちひゃくむに  
のありるが明治めいし四年よねん千八百七せんぱちひゃくしちに  
器數きさう五十万ごじゅうまんを倣なまる其質しつを買かひ入いれたるは十  
六万むそくターレルたーるる九くに十二じふにに  
賣價ばいげんは五十万ごじゅうまんターレルたーるる九くに三十七さんじゅうしちに  
ありて製せいしたる陶器たうきの

いふ其出いるは大小たうせうの花はな瓶びん肉皿にくざらおよび丸まる札しやくのさ  
しやこし二尺にせふむうのありありは半身はんしんの人の  
像ざうありひに水次みづぎ酒壺さうつが等ら又または小ちひさき人物じんぶつの像ざうも  
ありしづも其製せい上じやう等らふして買かひし事こと限り  
あり其繪ゑを油繪あぶらゑあり

王國おうこくサキソニヤ政府せいふの製造せいぞう所ところを寶永たからえい七年しちねん千七  
年せんしちねんに建たてたるものあり明治めいし四年よねん他國たこく小輸せうしゆ出いした  
る賣價ばいげん三十七万さんじゅうしちまんターレルたーるる九くに二十七しちじふしちに  
いふ高さたかさ四尺よせふ六七寸はつしちすんの大花おほいはな瓶びんあり三さん階かいに建たてた  
成なりたるものあり又三尺さんせふ五寸ごすんの花はな瓶びんに油繪あぶらゑあり



て人物を画きたるあり其製化してさうらゝ英一あ  
 りいた肉皿の英一きあり其画々油繪みく花  
 の枝をまこ一画きたるのこありとも風致ハ甚  
 ぶあり其四一枚の價二十四フロリン 一円程  
 或いは二十五フロリン 九を十一 あり其外小  
 さき人の像魚鳥などの細工もの等いづまも精  
 好あり

獨乙の出るあり又四角ある陶製の額あり一尺  
 五六寸ありも七八寸ありもありいづまも油繪  
 の人物精妙ありありいた小さき楕圓形の板あ

りこれ々小写書入きありいた指環あり箱め  
 こむものあり人物の繪甚ぶ善し

佛系西のコルリノ一といふ人を其都巴里斯の  
 任人みく日本模しと称せらる先年巴里斯の博

覽會千金の賞牌をも銀の賞牌をも取り一人を  
 其製造皆支那日本の模しあり支那うつし

最とも其もやう面白し龍の耳の形ちみ他また  
 る大花瓶々其形ちのおもしあきのもありあ地

の色とて画のものやうき温雅ふして賤しあら  
 ざ地々黄色みしてやが國みく俗み黄南系と

見聞録 卷之九



祇るもの小似<sup>し</sup>く<sup>く</sup>画<sup>え</sup>々<sup>々</sup>柳<sup>りゅう</sup>の<sup>ま</sup>実<sup>み</sup>と<sup>う</sup>常<sup>じょう</sup>し<sup>く</sup>を<sup>書</sup>書<sup>か</sup>  
 きたる支<sup>し</sup>那<sup>な</sup>を<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>却</sup>却<sup>かつ</sup>て<sup>支</sup>支<sup>し</sup>那<sup>な</sup>の<sup>上</sup>上<sup>じやう</sup>に<sup>出</sup>出<sup>で</sup>て<sup>を</sup>  
 又<sup>又</sup>同<sup>どう</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>出</sup>出<sup>で</sup>不<sup>ふ</sup>薩<sup>さつ</sup>摩<sup>ま</sup>う<sup>つ</sup>つ<sup>と</sup>い<sup>つ</sup>つ<sup>る</sup>に<sup>高</sup>高<sup>かう</sup>さ<sup>を</sup>を<sup>尺</sup>  
 六<sup>ろく</sup>七<sup>しち</sup>寸<sup>すん</sup>む<sup>む</sup>う<sup>う</sup>の<sup>花</sup>花<sup>か</sup>瓶<sup>びん</sup>あ<sup>く</sup>形<sup>かた</sup>ち<sup>ハ</sup>象<sup>ざう</sup>の<sup>耳</sup>耳<sup>みみ</sup>あり<sup>画</sup>  
 々<sup>々</sup>草<sup>そう</sup>花<sup>か</sup>を<sup>か</sup>け<sup>け</sup>々<sup>々</sup>赤<sup>せき</sup>緑<sup>りく</sup>む<sup>む</sup>ら<sup>ら</sup>さ<sup>さ</sup>き<sup>き</sup>黄<sup>わう</sup>色<sup>しき</sup>等<sup>とう</sup>の<sup>画</sup>画<sup>え</sup>の<sup>尺</sup>  
 尺<sup>せき</sup>も<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>金<sup>きん</sup>を<sup>忍</sup>忍<sup>にん</sup>け<sup>け</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>平<sup>へい</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>  
 ぎ<sup>ぎ</sup>滞<sup>たい</sup>り<sup>り</sup>て<sup>む</sup>む<sup>む</sup>ろ<sup>ろ</sup>ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>ど<sup>ど</sup>昔<sup>むかし</sup>の<sup>い</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>み<sup>み</sup>も<sup>も</sup>下<sup>した</sup>  
 々<sup>々</sup>ある<sup>る</sup>さ<sup>さ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>を<sup>摸</sup>摸<sup>も</sup>した<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>最</sup>最<sup>さい</sup>も<sup>も</sup>妙<sup>めう</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>れ<sup>れ</sup>  
 ハ<sup>ハ</sup>古<sup>こ</sup>薩<sup>さつ</sup>摩<sup>ま</sup>の<sup>う</sup>う<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>一<sup>いつ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>其<sup>その</sup>外<sup>ほか</sup>食<sup>しょく</sup>器<sup>き</sup>花<sup>か</sup>瓶<sup>びん</sup>等<sup>とう</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>  
 ひ<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>二<sup>に</sup>度<sup>ど</sup>焼<sup>やき</sup>の<sup>もの</sup>もの<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>ど<sup>ど</sup>種<sup>しゆ</sup>々<sup>々</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>て<sup>て</sup>こ<sup>この</sup>の<sup>人</sup>人<sup>び</sup>

全<sup>ぜん</sup>く<sup>く</sup>陶<sup>たう</sup>器<sup>き</sup>製<sup>せい</sup>の<sup>形</sup>形<sup>かた</sup>を<sup>他</sup>他<sup>た</sup>に<sup>柱</sup>柱<sup>ちゆう</sup>々<sup>々</sup>三<sup>さん</sup>四<sup>し</sup>箇<sup>かん</sup>を<sup>續</sup>續<sup>つづ</sup>ぎ<sup>合</sup>  
 せ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>もの<sup>の</sup>壁<sup>かべ</sup>々<sup>々</sup>三<sup>さん</sup>尺<sup>せき</sup>四<sup>し</sup>方<sup>ぱう</sup>む<sup>む</sup>う<sup>う</sup>の<sup>陶</sup>陶<sup>たう</sup>板<sup>ばん</sup>を<sup>を</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>  
 合<sup>あ</sup>せ<sup>せ</sup>壁<sup>かべ</sup>の<sup>外</sup>外<sup>ほか</sup>に<sup>蓮</sup>蓮<sup>れん</sup>池<sup>ち</sup>を<sup>画</sup>画<sup>え</sup>き<sup>き</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>もの<sup>の</sup>形<sup>かた</sup>に<sup>其</sup>其<sup>その</sup>内<sup>うち</sup>  
 小<sup>せう</sup>お<sup>お</sup>の<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>の<sup>こ</sup>こ<sup>を</sup>を<sup>陳</sup>陳<sup>ちん</sup>列<sup>りやく</sup>せ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>い<sup>い</sup>づ<sup>づ</sup>も<sup>も</sup>精<sup>せい</sup>好<sup>こう</sup>  
 ある  
 同<sup>どう</sup>國<sup>こく</sup>の<sup>人</sup>人<sup>び</sup>ル<sup>る</sup>ー<sup>ソ</sup>ソ<sup>ー</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>る<sup>る</sup>者<sup>もの</sup>々<sup>々</sup>日<sup>にっ</sup>本<sup>ぽん</sup>の<sup>に</sup>倭<sup>わ</sup>風<sup>ふう</sup>  
 の<sup>画</sup>画<sup>え</sup>支<sup>し</sup>那<sup>な</sup>の<sup>芥</sup>芥<sup>かい</sup>子<sup>し</sup>園<sup>えん</sup>十<sup>じゅう</sup>行<sup>ぎやう</sup>斎<sup>さい</sup>あ<sup>あ</sup>ど<sup>ど</sup>の<sup>画</sup>画<sup>え</sup>譜<sup>ふ</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>画</sup>画<sup>え</sup>を<sup>を</sup>  
 摸<sup>も</sup>して<sup>て</sup>陶<sup>たう</sup>画<sup>え</sup>を<sup>か</sup>き<sup>き</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>ハ<sup>ハ</sup>ル<sup>る</sup>ビ<sup>び</sup>レ<sup>れ</sup>ー<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>人<sup>び</sup>々<sup>々</sup>  
 一<sup>いつ</sup>尺<sup>せき</sup>三<sup>さん</sup>四<sup>し</sup>寸<sup>すん</sup>の<sup>鉢</sup>鉢<sup>はち</sup>の<sup>こ</sup>こ<sup>を</sup>を<sup>出</sup>出<sup>で</sup>せ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>其<sup>その</sup>摸<sup>も</sup>様<sup>やう</sup>々<sup>々</sup>支<sup>し</sup>那<sup>な</sup>  
 印<sup>いん</sup>度<sup>ど</sup>土<sup>ど</sup>耳<sup>じ</sup>其<sup>その</sup>邊<sup>へん</sup>の<sup>風</sup>風<sup>ふう</sup>を<sup>取</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>彩<sup>さい</sup>色<sup>しき</sup>々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>國<sup>こく</sup>万<sup>まん</sup>古<sup>こ</sup>

見聞録

卷之十九

十四



の如くある鉢の面をみみ種々の模様を流け中  
央にわが國の北高漫画みうり竹島虎風雷神  
龍等などをうつせり

又佛蘭西人の出品のうちみわと一尺七八寸も  
あるべき大鉢に半身の人物を書きたるもの三つ  
五色の彩どを幽雅絶妙あるものあり又壁をか  
ざる趣き遠く花を植う趣きものあり其  
外食器花瓶燭臺魚鳥の細工、貝畫一の菓子皿等  
紫をもつくあけやのみありたるあり  
ハシエーといふ人の食器々玉のやうに透き通る

質のりのみく画を多くせば染色を鮮くみみ  
たる質の善きと薬の美しきを博覧會中の一二と  
もりみべー

ブーランセーといふ人の食器々堅地みく模様  
新らしい品を格別うれたものみあらざれども其價を  
極めく下直あを法とせし製法を簡畧みよる事  
を工支し價下直ふりて出来るやうみせーあり  
英國の陶器々大み自余の政羅巴諸國と加わり  
雅あるりの多し其政府の製造所の出ふみ日本  
の象牙細工を摸したる花瓶筆立等あり



繪を摸<sup>うつ</sup>—たを精好<sup>せいこう</sup>といふべきものふたありらざりし  
 とも能く象牙の髹<sup>つや</sup>を賽<sup>み</sup>せたてしこれハ極上の薬を  
 きハめく柔<sup>やわ</sup>らふ—焼<sup>や</sup>き上げく後上<sup>のちう</sup>を研<sup>く</sup>ぎた  
 るありて焚<sup>てつめい</sup>明<sup>めい</sup>ら去年の事<sup>こと</sup>みく製<sup>せい</sup>—出<sup>で</sup>して初<sup>はつ</sup>め  
 て火博覽會<sup>えくらんかい</sup>ふ出<sup>で</sup>—たてといふ又日本の男女<sup>おんどにま</sup>のた  
 ちたら姿<sup>まが</sup>を焼物<sup>やきもの</sup>みく作<sup>つく</sup>てたををうみ出<sup>で</sup>—た  
 たり

英吉利<sup>いぎりま</sup>のミントンといふ人の出<sup>で</sup>る<sup>で</sup>み<sup>み</sup>を紺色<sup>こんいろ</sup>の  
 陶板<sup>とうばん</sup>み白<sup>しろ</sup>き、画<sup>え</sup>の具<sup>ぐ</sup>みく人物<sup>じんぶつ</sup>を画<sup>え</sup>きたるを墨水<sup>すいじき</sup>  
 の箱<sup>はこ</sup>の四方<sup>しやうほう</sup>と上<sup>うへ</sup>面<sup>めん</sup>とみ附<sup>つ</sup>けたるありて最上<sup>さいじやう</sup>のもの

のあり又縁茶<sup>みづぢあ</sup>をの香爐<sup>かうろ</sup>花瓶<sup>けいひん</sup>甚<sup>た</sup>く美<sup>うつく</sup>しく掛<sup>か</sup>時<sup>じ</sup>  
 斗<sup>りぬ</sup>のわが薩摩<sup>さつま</sup>み似<sup>に</sup>せくひがふ—み—古風<sup>こふう</sup>の摸<sup>も</sup>拓<sup>たく</sup>  
 を画<sup>え</sup>きたるありありひら茄子籠<sup>なすかご</sup>み童子<sup>どうじ</sup>の立<sup>たち</sup>  
 る燭臺<sup>あぶくたみ</sup>高さ一尺<sup>いちせき</sup>をありありありて其<sup>かこ</sup>の籠<sup>かご</sup>のら不<sup>ふ</sup>た  
 らとく—ら童子<sup>どうじ</sup>の背<sup>せ</sup>等<sup>どう</sup>みらきハ先<sup>ま</sup>く細<sup>こま</sup>めきもや  
 うあり初<sup>はつ</sup>め後<sup>ご</sup>くみ他<sup>た</sup>てて摸<sup>も</sup>拓<sup>たく</sup>を画<sup>え</sup>きき後<sup>ご</sup>本<sup>ほん</sup>竈<sup>かま</sup>  
 みく續<sup>つ</sup>ぎたるものありて—其<sup>こ</sup>ん<sup>ご</sup>を用<sup>もち</sup>おたふおも  
 ふべ—の外<sup>ほか</sup>大<sup>おほ</sup>瓶<sup>びん</sup>水<sup>みづ</sup>瓶<sup>びん</sup>壺<sup>つぼ</sup>の萩<sup>はぎ</sup>腰<sup>こし</sup>の草<sup>くさ</sup>花瓶<sup>けいひん</sup>等<sup>どう</sup>を  
 べて支那<sup>しな</sup>風<sup>ふう</sup>をうつ—紺<sup>こん</sup>みく—草<sup>くさ</sup>を画<sup>え</sup>き又<sup>また</sup>ら打<sup>うち</sup>  
 こみみ—たるありて中<sup>ちゆう</sup>く—皆<sup>みな</sup>ミントンの出<sup>で</sup>るあり



其外古伊万里焼をうつしあるひは支那の撮をうつし又花巻の巻多る花瓶などあり花巻の日本支那の形ちみあり其器は通例の政君巴風ありたるりのありありあるひは角の額面ありあるひは楕圓の額面あり保附の山水人物のありありあるひは佛菩薩西うつしありあり

英國のミントンホルリンスの社の出る壁をおよぶ用うる板瓦ありあり各四寸は角厚きぬ六分りの焼物の板あり古今様々の模様を画きつぎ合せく壁を覆ふものあり又同社の出る

の敷瓦を寸法前の如くありて黒白黄色赤青緑のものありを毛くの石ありあるひは玉又硝子の粉を練りて作り埋めたるが如く極めく堅き型をもち押しめく焼たるものあり其さぬ以右利のモサイクみ似たりれをもちモサイクといへる中其細工各國の出る多しあるひはも元来此社の発明ありといふ或は六寸に方の板をつし山水花鳥の一枚繪をあせるもの又を横幅五寸許り長さ三尺をどの陶の板あり花鳥人物などを画き聯の如くあり見ゆらあり



られた壁の飾りも用うるものもしく風致あてて  
おもしりきりのあり

其外子ども二人みく花籠をからぎたる或ひは  
錦出み金もやうのへりたるなどあるひは日本の服の  
形ちを焼物みく作られたるあるひは頼朝の画を  
書きたるなど皆日本模しるなり

元来陶器へ支那日本のりのりも古く且有  
名あり一故右の如く英佛の出るも模しるを多く  
出せりて其日本を模し支那を擬するも其  
修み字びり如く摸らるるあり味をうつして

趣向を變じ形ちを賣せて色を彩たり一智  
巧を極免工夫をこらして一逐み骨格給の劣りき  
をあげてされど各所の製造所日く彩形を發明  
し輸出する年々増せしは支那の工人もと  
まといふ産き工夫もかく他の術を學ぶ心もあ  
有来る昔のすくみ製するくつくろく映夜出せし陶  
器の種類も彩古の青磁、珠砂、焼青花、画模、振、黄南  
京、等、みくいづれもあしきくみあはるるれハ昔  
の姿も止しり彼年々彩たりあはるる遂に及  
ばぬやうなるべし一実も款するべき事ありとや

見聞録 卷之九



の國各所の製造場もくも能くくも人を附け  
輸出を多くせらるやうにせまふべき事なり

支那の七寶細工は有名のりのみしてらのび持  
ち来まらるも中くすくわの國もくも近來次第

巧みあり方らぬ細工をせらるやうにありぬ然るも  
佛蘭西人これを模造せんと先年より人をを用ひ

幾度仕損じたりと云ふを屈せだ試檢を  
一七年よりして遂に其功成るといふものなり

一たりと云ふ其る際もよく致ぐらふも味あり  
これより西洋人の職業も人を雇ひて次第に進歩

支那の製造場

支那の製造場もくも能くくも人を附け  
輸出を多くせらるやうにせまふべき事なり

支那の七寶細工は有名のりのみしてらのび持  
ち来まらるも中くすくわの國もくも近來次第

巧みあり方らぬ細工をせらるやうにありぬ然るも  
佛蘭西人これを模造せんと先年より人をを用ひ

幾度仕損じたりと云ふを屈せだ試檢を  
一七年よりして遂に其功成るといふものなり

一たりと云ふ其る際もよく致ぐらふも味あり  
これより西洋人の職業も人を雇ひて次第に進歩



やまうちて銅器を交へ出せりうとかり小斗其銅  
色真小せきうるといふづーかろこの賽ハ佛を西の  
顔みもつんえとる

魯西亞の顔みをわして三尺二三寸の丸札ありま  
つる小花寄せを画きしるるとそ細工も画も精密な  
る又切ぬき透しの皿茶碗ありひる金物細工にて  
續ぎ多ふ花瓶ありひる衣さ三尺幅二尺三寸に  
寸もあらづき額面小池繪みく佛像を書きたる  
ふど甚だ精妙あり又丸き額み硝子を張り申小  
陶製の造り花あり其巧こめて細のき車布細

工紙細工の造り花みもおろろぬもの  
以右利の陶器を多くたつイヤンスとてわが國  
の薩摩焼淡路焼やうの古貨みく透明あるざる  
ものありいづれも昔の細工を摸したるものな  
る其画模拓今日の風とて大み異れを緑赤黄  
色皆本窓の着色ゆいて上代のどのみも下もな  
る風を摸せられすく雜きやごあり然れども  
のを銘々マヨリカと唯あるは以右利の出品  
りづも亦一種のこふして別み彩寄のりの  
あり然れども其最も精妙あるは地をうらき茶



色の陶器にてらね白土をぬり小刀みく摸板  
 を彫りてらね地の茶色のあらわらうやうみたる  
 りのあり其刀法甚く妙ありさう彫あげて後上  
 薬をかけ焼たるりのとえゆ精妙ある事比類  
 あり慈まごもこれ昔の摸あり

和菓の類も紫をみして遠通りたる水次あり

硝子も数せり

瑞典の出入切ぬきどのの大蓋物ありひね

花の細工物も連環をつけたるありひね花瓶も

葡萄をつもたる等いづも細工の精妙ある見

る人の目を驚かせり

其余西洋の諸國いづとも陶器の出入あり形ち

も各も大同小異あり

土耳其希捕埃及トニスローマニヤ及び東印度の

類も多し素焼の陶器あり其製作拙けよど

も古雅のおもむきあり

魯西亞の類も又五大洲の男女の半身像を陶

器にて骨相血色其國土のさむを記るべし

一む下も何洲くくも國土の名を記せり

これらのものを其製みくつぐど本区のものか



まども其用を才二十六区教育の部も属をべき  
ものあり

九区の才三区を硝子細工よしてられまゝ各國

とも硝子細工の出品ありあまをそのうち燠地利國ホエ

ミヤ州の出品うらみ多くして且美しく大ある

蠟燭建あり天井より垂下ごとくものよして鍍

金の木の枝の如き形ちのりの長さ九尺余り

あるが八方よすひ出ぐこれ硝子めく作りた

る蠟燭立數十を三階あるひを五階みつゝぬこ

き硝子めく作りたる花を糖蜜ひこれより硝

子の三角柱の長さ四寸をのりあるをたたく

ハ造り花硝子けけたる短冊の如くあまゝ下布た

すかくの如きものをかけ連ら糸たるとららね

遠く望めぬ糸生のうね極盛りよさらぬ乱きたる

お如く又あらぬ硝子の岩硝子波の花のうと

日の光線を受くる時を架三角柱を通り碧紅黄

色等虹の如きせいろをあらしうかしくみう

つくしき影をせせら

その外硝子細工の物ハ甲の長廊の才九を全く

占免このとつらみあらべつゝぬ其品くを盃水



のこ大小の皿鉢等わりのみ及びぞ瓶子水つき  
 ありいは鏡ありいは敷の床飾り又は婦人の  
 耳胸飾りありいは全く硝子めく作をありたる  
 丸札ありいは径一尺をのり長さ七尺をのりあ  
 る硝子板も出たりたる五色み彩る硝子板大小い  
 ろくありはべつね  
 硝子細工の器物の色を種々みして白きを透明  
 ありいは曇りありいは玉の如きもありはまきわ  
 碧色藍淺黄玫瑰の色珊瑚樹色黒きを帯び  
 一は小豆の如く透明あるは澄たる水み紅を流

せーが如くまき通らざらる古き朱塗玉の器の  
 如く若葉の緑老木の古葉朽葉色ある葡萄み  
 似たる栗色茶色の濃き薄き黒きを臍ぬりの  
 漆の如くありいはこれみさほくの加さを高く  
 く鑄出たりはありいは低く彫り穴詰めたるある  
 ひら其地をらもそみかー模振を磨きみ出せ  
 るありは金めくもやうを画きたるまといつあけ  
 をありたるあるは金色のあがやのありたる硝子  
 の色み映し合ひは美しき事極まりあり又七寶  
 を摸せーありありいは白き瓶子の玉の如く透



明あらざりておのづから温雅あらふ古代の族  
 及やうの画を思をみく書きたるなど  
 て俗あつて温雅みして拙うらむ又今やうの画  
 のうつくしき草花人物などを油画めて画  
 けらある硝子の地のさまぎふ海あおる画の具の  
 萌黄紅紫あざやき合ひ陶器ふかきたる油繪と  
 を又おのづからおもむき美なり  
 元々其の如き硝子細工を其長廊の左右と中央  
 の通る幅甚だ廣き高札を置きその上面に一  
 面を鏡を敷きその右の如く緑紅をくあおる

硝子細工の諸物をつつ祿たきを其きぬたうへ  
 へ井出の山吹花路の萩苑田の紅葉あとの水  
 映トたるもつれふを勝るべくもあつてと思つる  
 其上を前ふある一たる花ざつてそのまゝあつた  
 うその幅燭立あまゝ垂まふ一左右の壁に姿  
 見の鏡あまゝ掛け大小りらくの玉鏡をも下け  
 たきを硝子を互ひみかゞやき合ひかゝつて映  
 ぶらうみらり三角柱うらむ及射あつる七色を  
 間も動揺ららるゝと美し水晶宮ともいふべき  
 りのあり



玉鏡ありてあるありて径二尺余のわのも  
 たる婆見の鏡を幅二尺余長さ一間余ありて其  
 價二百七十五フローリン 十元をのり ありあり  
 同ト大ききさありて千フローリン 十元 ありあり  
 其皆其縁を金ありて又大ある鏡の中を楮圓あり  
 切りて常の鏡の如く磨き周圍も共水硯を布  
 てありてあてがら曇り曇りと浮き上げとてか  
 ら草のものをしを出入りあるありて其價を十二百フ  
 ローリン 十元 ありあり 黒き木ありて箱隻を  
 他よりありて古雅ありて彫刻ありてあり金縁あり

の如く花ありてありてだれも雅ありて上品あり  
 長さ二間半を幅八尺をのり其價を九百五十フ  
 ローリン 十元 あり 又佛蘭西人の出品した  
 る鏡を幅五尺ありて長さ二間余もありて周  
 圍ありて五色の硝子ありて水硯をしきたるをり  
 のかちありて切り組合せく草花の形ありてあり  
 られを以て纏ひて飾りとありて左右ありて草花  
 の間ありて童子の立ちたるを彫るられもつともあり  
 きりのありて其價五千フローリン 三百元 あり 又  
 同國の出品ありて幅二間長さ三間ありてあり



られまゝ鏡の最も大あるものあり  
 奥地利の出不<sup>あつ</sup>厚さ一分ありいは五<sup>ぶ</sup>ありいは  
 一寸の硝子板の鑄<sup>お</sup>たるまゝ<sup>し</sup>研<sup>と</sup>いでい<sup>ま</sup>し<sup>ご</sup>研<sup>と</sup>お  
 磨<sup>み</sup>の<sup>み</sup>ざる<sup>り</sup>の<sup>を</sup>出<sup>せ</sup>せ<sup>る</sup>姿見の鏡<sup>う</sup>み<sup>ら</sup>る<sup>地</sup>板<sup>い</sup>  
 ある其か<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>み<sup>共</sup>硝子板<sup>が</sup>を<sup>研</sup>ぎ<sup>磨</sup>き<sup>さ</sup>る<sup>見</sup>  
 本<sup>を</sup>も<sup>つ</sup>つ<sup>本</sup>あり<sup>い</sup>は<sup>水</sup>碓<sup>の</sup>敷<sup>か</sup>の<sup>又</sup>本<sup>も</sup>  
 数種<sup>出</sup>せ<sup>る</sup>  
 圓堂の内<sup>み</sup>も<sup>姿</sup>見<sup>の</sup>鏡<sup>の</sup>地<sup>板</sup>い<sup>ら</sup>く<sup>あ</sup>る<sup>い</sup>ら  
 鑄<sup>た</sup>ら<sup>ま</sup>し<sup>あ</sup>ら<sup>も</sup>の<sup>あ</sup>ら<sup>い</sup>は<sup>半</sup>研<sup>ぎ</sup>た<sup>ら</sup>る<sup>も</sup>の  
 あり<sup>い</sup>は<sup>全</sup>く<sup>研</sup>た<sup>ら</sup>る<sup>あ</sup>ら<sup>い</sup>は<sup>ら</sup>り<sup>も</sup>を<sup>研</sup>ぎ<sup>た</sup>  
 る<sup>あ</sup>ら<sup>い</sup>は<sup>磨</sup>き<sup>上</sup>げ<sup>た</sup>ら<sup>る</sup>あ<sup>ら</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>で<sup>水</sup>碓<sup>を</sup>  
 を<sup>し</sup>き<sup>た</sup>ら<sup>る</sup>等<sup>列</sup>し<sup>た</sup>ら<sup>る</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>も</sup>  
 又<sup>硝</sup>子<sup>を</sup>甚<sup>ぶ</sup>細<sup>く</sup>吹<sup>き</sup>て<sup>糸</sup>と<sup>あ</sup>し<sup>ら</sup>れ<sup>め</sup>く<sup>布</sup>  
 を<sup>織</sup>り<sup>あ</sup>ら<sup>い</sup>は<sup>釋</sup>人<sup>の</sup>帽<sup>子</sup>を<sup>外</sup>種<sup>の</sup>もの<sup>と</sup>  
 を<sup>せ</sup>る<sup>あ</sup>ら<sup>硝</sup>子<sup>の</sup>糸<sup>の</sup>も<sup>用</sup>る<sup>く</sup>糸<sup>の</sup>少<sup>し</sup>も  
 用<sup>る</sup>が<sup>れ</sup>ど<sup>も</sup>を<sup>さ</sup>り<sup>ら</sup>る<sup>や</sup>り<sup>ら</sup>る<sup>糸</sup>織<sup>り</sup>の  
 わ<sup>の</sup>如<sup>き</sup>を<sup>ご</sup>たく<sup>せ</sup>る<sup>以</sup>右<sup>利</sup>國<sup>を</sup>子<sup>に</sup>ヤ<sup>の</sup>  
 細<sup>工</sup>と<sup>い</sup>は<sup>ら</sup>れ<sup>め</sup>を<sup>務</sup>ら<sup>し</sup>め<sup>る</sup>人<sup>の</sup>賞<sup>給</sup>せ  
 る

其外<sup>硝</sup>子<sup>細</sup>工<sup>め</sup>く<sup>ら</sup>ま<sup>ら</sup>き<sup>品</sup>を<sup>卦</sup>算<sup>文</sup>鎮<sup>を</sup>  
 見聞録 卷之九 三



初め種々の文房具ありける種々の玉とありあ  
 るいは大小色々の鈕釦とありあける婦人の  
 耳飾り胸飾りとありあける其色もさかざるく  
 あるありける瑪瑙ありける琥珀ありける真珠  
 水晶珊瑚樹孔雀石等も擬しありける金鋼石も  
 擬したる如く琥珀の色艶真珠の光りも製作の  
 よきものも真の物とおもふものもあけるいは  
 五色の硝子をよせ合せて以て利のモサイクの如  
 くみしりねみしり札を作したるあり  
 白耳時の類も径一尺長さ一宿余の硝子の管を

初め大小種々の管あり又五色の彩硝子も模様  
 を研ぎ出したりかもある獨乙の類も燭臺の花  
 の如きものも外種々の食器硝子板等の類あま  
 と出ふし自余の諸國もさかざるの出ふありて佳  
 品も女ありけるといへども燠地利のものも数  
 も多く且つ有名あるものあきざ専ら燠地利を  
 録して其余を略す  
 以て巴みくわやの國肥前の有田の陶器製造所も  
 才一等の褒賞を得るあり  
 其外才一等の褒賞を得たり



一 獨乙州普魯社の都ベルリンあり政府の陶器製造所同國スレシヤ硝子製造所各一ツあり  
 同州薩索尼のマイッセンあり政府の陶器製造所同國ドレスデンのフェロイ及びボツェといふ人の粘土細工同國同所のシーメンといふ人の硝子製造所各一ツあり  
 佛系西の都パリスのテッキといふ人のファイヤンス同所のハーチエ、アッド及びペピン、レハレウルブレールといふ人の陶器同國セフレの陶器製造所同國の都パリスの化学用の硝子の器械製造

會社同所のライル、チャルレスといふ人の硝子製造所各一ツあり五箇  
 一 奧地利國の都ウヰンナの瓦製造所同所のスライベル及び子ツフェンといふ人の硝子製造所同國ボエミヤのノイルス、子ツフェンといふ人の硝子製造所各一ツあり三箇  
 一 魯西亜政府の石切工場同國の都ペートルスボルグの政府の陶器製造所同所政府の硝子製造所各一ツあり三箇  
 一 英吉利のミントンの陶器製造所、同國ウラルセ

見聞録 卷之九

三十一



ステルトといふ所の陶器製造所各一ツを備へて二箇

一 以<sup>イ</sup>太<sup>タ</sup>利<sup>リ</sup>のフ<sup>フ</sup>ロ<sup>ロ</sup>ー<sup>ー</sup>レ<sup>レ</sup>ニ<sup>ニ</sup>スのギ<sup>ギ</sup>ノ<sup>ノ</sup>リ<sup>リ</sup>ー<sup>ー</sup>ロ<sup>ロ</sup>ー<sup>ー</sup>レ<sup>レ</sup>ニ

ヅ<sup>ヅ</sup>マ<sup>マ</sup>ル<sup>ル</sup>チ<sup>チ</sup>ェ<sup>ェ</sup>ー<sup>ー</sup>セ<sup>セ</sup>といふ人の擬<sup>ギ</sup>陶<sup>トウ</sup>器<sup>キ</sup>製<sup>セイ</sup>造<sup>ゾウ</sup>同<sup>ドウ</sup>國<sup>コク</sup>を

子<sup>シ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>の鏡<sup>カガミ</sup>及<sup>カ</sup>び硝<sup>シヨウ</sup>子<sup>シ</sup>製<sup>セイ</sup>造<sup>ゾウ</sup>所<sup>ショ</sup>各<sup>カク</sup>一<sup>イツ</sup>於<sup>オ</sup>て二<sup>ニ</sup>箇

一 白<sup>ベ</sup>耳<sup>ニ</sup>時<sup>ジ</sup>のベ<sup>ベ</sup>ン<sup>ン</sup>子<sup>シ</sup>ル<sup>ル</sup>ト及<sup>カ</sup>びビ<sup>ビ</sup>フ<sup>フ</sup>ラ<sup>ラ</sup>ル<sup>ル</sup>トといふ人

の宏<sup>マク</sup>障<sup>ショウ</sup>子<sup>シ</sup>用<sup>ヨウ</sup>ら硝<sup>シヨウ</sup>子<sup>シ</sup>の製<sup>セイ</sup>造<sup>ゾウ</sup>一<sup>イツ</sup>

わお國<sup>クニ</sup>英<sup>エイ</sup>区<sup>ク</sup>あ<sup>あ</sup>く賞<sup>ショウ</sup>牌<sup>パイ</sup>を<sup>を</sup>得<sup>エ</sup>たるを<sup>を</sup>東<sup>トウ</sup>京<sup>キョウ</sup>の<sup>の</sup>船<sup>セン</sup>倉<sup>カウ</sup>松<sup>ソウ</sup>

又<sup>マタ</sup>郎<sup>ラウ</sup>の<sup>の</sup>玉<sup>タマ</sup>細<sup>サイ</sup>工<sup>コウ</sup>横<sup>ヨコ</sup>須<sup>ス</sup>賀<sup>カ</sup>造<sup>ゾウ</sup>船<sup>セン</sup>所<sup>ショ</sup>の<sup>の</sup>建<sup>ケン</sup>築<sup>チキ</sup>諸<sup>シュ</sup>材<sup>サイ</sup>及<sup>カ</sup>び我<sup>ワガ</sup>

國<sup>クニ</sup>の<sup>の</sup>花<sup>ハナ</sup>崗<sup>カウ</sup>石<sup>シキ</sup>大<sup>ダイ</sup>理<sup>リ</sup>石<sup>シキ</sup>水<sup>スイ</sup>晶<sup>セイ</sup>を<sup>を</sup>帝<sup>テイ</sup>たる<sup>の</sup>硝<sup>シヨウ</sup>子<sup>シ</sup>研<sup>ケン</sup>出<sup>シュ</sup>

の硝<sup>シヨウ</sup>子<sup>シ</sup>と<sup>と</sup>陶<sup>トウ</sup>器<sup>キ</sup>の<sup>の</sup>款<sup>カウ</sup>め<sup>め</sup>て<sup>を</sup>鹿<sup>カ</sup>兒<sup>ニ</sup>島<sup>シマ</sup>外<sup>ガイ</sup>愛<sup>アイ</sup>知<sup>チ</sup>外<sup>ガイ</sup>澄<sup>セイ</sup>  
路<sup>ロ</sup>の<sup>の</sup>三<sup>サン</sup>平<sup>ヘイ</sup>京<sup>キョウ</sup>都<sup>ト</sup>粟<sup>ム</sup>田<sup>デン</sup>五<sup>ゴ</sup>條<sup>ジョウ</sup>坂<sup>カ</sup>肥<sup>ヘイ</sup>前<sup>ゼン</sup>の<sup>の</sup>長<sup>チヤウ</sup>崎<sup>キ</sup>の<sup>の</sup>及<sup>カ</sup>  
び<sup>を</sup>東<sup>トウ</sup>京<sup>キョウ</sup>の<sup>の</sup>禹<sup>ウ</sup>工<sup>コウ</sup>皆<sup>カク</sup>賞<sup>ショウ</sup>牌<sup>パイ</sup>を<sup>を</sup>得<sup>エ</sup>たる<sup>を</sup>石<sup>シキ</sup>川<sup>カウ</sup>外<sup>ガイ</sup>谷<sup>コク</sup>三<sup>サン</sup>重<sup>ジュウ</sup>外<sup>ガイ</sup>  
古<sup>コ</sup>及<sup>カ</sup>び<sup>を</sup>岐<sup>キ</sup>阜<sup>フ</sup>外<sup>ガイ</sup>の<sup>の</sup>万<sup>マン</sup>助<sup>シュ</sup>の<sup>の</sup>表<sup>ヘイ</sup>章<sup>チャウ</sup>を<sup>を</sup>得<sup>エ</sup>たる

博覽會見聞錄卷之九終



兵部金  
 卷之九  
 三  
 兵部金  
 卷之九  
 三



